

通訳案内士試験対策＜日本史の時代区分と各文化の特徴＞

西暦年	時代区分	文化	特徴	
数十万年前 ～約1万年前	旧石器時代	旧石器文化	石器時代のうちで最古の時代。利器として打製石器・骨角器を使用し、生活は狩猟・採集によった。30万年前にさかのぼるともいわれる。旧石器時代の社会は、群れまたは社会ごとに指導者が存在した。 男性・女性はおおむね平等 で、男性は狩猟、女性は漁労および育児を事としていたが、この役割はしばしば共有されており、明確な分業はされていなかったと考えられている。	
約1万年前 ～紀元前4世紀	縄文時代	縄文文化	旧石器時代と縄文時代の違いは、土器の出現や竪穴住居の普及、貝塚の形式などがある。縄文時代の終わりについては、地域差が大きいものの、定型的な水田耕作を特徴とする弥生文化の登場を契機とするが、その年代については紀元前数世紀から紀元前10世紀頃までで、多くの議論がある。	
紀元前3世紀 ～3世紀	弥生時代 「格差社会」開始	弥生文化	弥生時代の特徴は、(1)稲作が始まったこと(2)金属器の使用が始まったこと(3) 貧富や身分の差が表れ始めたこと である。その身分格差は、弥生時代の墓の発掘により伺い知ることが出来る。	
4世紀～6世紀	古墳時代 部民制(奴隸制社会)の発達	古墳文化	古墳時代は3世紀半ば過ぎから7世紀末頃までの約400年間を指すことが多い。中でも3世紀半ば過ぎから6世紀末までは、前方後円墳が全国で造り続けられた時代であり、前方後円墳の時代と呼ばれる。7世紀に入っても、方墳・円墳、八角墳などが造り続けられるが、この時期を古墳時代終末期と呼ぶ。西暦266年から413年にかけて中国の歴史文献における倭国の記述がなく詳細を把握できないため、この間は「空白の4世紀」とも呼ばれている。	
7世紀	飛鳥時代 (6世紀末～710)	飛鳥文化	推古朝を頂点として 大和を中心に華開いた仏教文化 である。時期は、一般に仏教渡来から大化の改新までをいう。朝鮮半島の百済や高句麗を通じて伝えられた中国大陸の南北朝の文化の影響を受け、国際性豊かな文化でもある。多くの大寺院が建立され始め、仏教文化の最初の興隆期であった。	
		白鳳文化	645年(大化元年)の大化の改新から710年(和銅3年)の平城京遷都までの飛鳥時代に華開いたおらかな文化である。 天智天皇のときに最盛期 を迎えた。	
8世紀	奈良時代 (710～794)	天平文化	7世紀終わり頃から8世紀の中頃までをいい、奈良の都平城京を中心にして華開いた貴族・仏教文化である。この文化を、 聖武天皇のときの元号天平を取って天平文化 と呼ぶ。あおによし奈良の都の。	
9世紀	平安時代 (794～1185) 荘園(権力者、有力寺社の私有地)が発達	弘仁・貞観文化	弘仁・貞観年間を中心とする平安時代前期(ほぼ9世紀に相当)の文化。弘仁(810～824)(嵯峨天皇、淳和天皇)貞観(859～877)(清和天皇)	
10世紀		国風文化	10世紀の初め頃から11世紀の摂関政治期を中心とする文化 であり、12世紀の院政期文化にも広く影響を与えた。以前は894年の遣唐使停止により中国の影響を抜け出し、日本独自の文化が発展したと一般的に解釈されてきた。しかし、遣唐使廃止後も対外交流は盛んで中国の文物は多く日本に流入していた。そのため、遣唐使停止を国風文化の画期とするのは誤りで、遣唐使停止は日本文化の国風化を加速させる要因であったとみることが適当である。	
11世紀				
12世紀	鎌倉時代 (1185～1333) 「御恩と奉公」による封建制成立。守護、地頭が荘園を侵食してゆく。	院政期文化	平安時代末葉の11世紀後半から鎌倉幕府成立に至る12世紀末にかけての日本の文化 。院政期は、日本社会史上、貴族勢力の衰退と武士勢力の伸長という過渡期に位置しており、文化の面でもこのような時代の気風を反映した新しい動きがみられた。	
13世紀		鎌倉文化	鎌倉幕府の成立した12世紀末葉から幕府が滅亡した14世紀前半にかけての日本の文化 。王朝国家からの自立を指向する本格的な武家政権が東国に開かれた時代であり、各方面で新しい文化的所産が生まれた。	
14世紀	建武の新政 (1333～1335)			
	室町時代 (1336～1573)	南北朝時代 (1336～1392)	北山文化	室町時代初期の文化で、三代將軍足利義満(1358～1408)の北山山荘 に代表され、14世紀末～15世紀前半までをさす。東山文化に対して使われる言葉である。ただし、今日の歴史学では東山文化と合わせて「室町文化」と呼ぶのが一般的である。
16世紀	安土桃山時代 (1573～1603)	戦国時代 (1493～1573)	東山文化	室町時代中期の文化で、八代將軍足利義政(1436～1491)が築いた京都の東山山荘 を中心に、武家、公家、禅僧らの文化が融合して生まれた。慈照寺銀閣は東山文化を代表する建築である。
		桃山文化	織田信長と豊臣秀吉によって 天下統一事業が進められていた安土桃山時代の日本の文化 である。この時代、戦乱の世の終結と天下統一の気運、新興大名・豪商の出現、さかんな海外交渉などを背景とした、豪壮・華麗な文化が花ひらいた。	
17世紀		寛永文化	寛永年間(1624～1645)を中心とする文化 。寛永文化の中心は京都であり、中世以来の伝統を引き継ぐ町衆勢力と後水尾天皇を中心とする朝廷勢力が、封建制を強化する江戸幕府に対抗する形で古典文芸・文化の興隆を生み出し、後に江戸においても儒学・武家を中軸とした文化が形成された。	
18世紀	江戸時代 (1603～1868) 貨幣経済の発展が、農業経済中心に構築された幕藩体制を揺るがし、明治維新の内的要因となる	元禄文化	元禄時代(1688～1707)、主に京都・大坂(大阪)などの上方を中心として発展した文化 である。特色として庶民的な面が濃く現れているが、必ずしも町人の出身ばかりでなく、元禄文化の担い手として武士階級出身の者も多かった。上方から発生し、朱子学、自然科学、古典研究が発達した。尾形光琳による琳派、土佐派などが活躍、野々村仁清、本阿弥光悦等による陶芸が発展。	
19世紀		化政文化	文化・文政期(1804～1830)を中心とする町人文化 。政治・社会の出来事や日常生活を風刺する川柳が流行した。また、文学では、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』のように、庶民生活を面白おかしく描いた、滑稽な作り話が好まれた。版画では、多彩な色彩を表現できる技術が向上し、そのような技術で作られた版画は錦絵と呼ばれた。江戸から発生し、商人などの全国的交流や、出版・教育の普及によって各地に伝えられていった。また、これに伴い、内容も多様化していき、庶民へと浸透していった。風俗上で時代劇の舞台とされることが最も多いのがこの時代である。	
	明治時代 (1868～1912)	文明開化	明治時代の日本に西洋の文明が入ってきて、制度や習慣が大きく変化した現象 のことを指す。さらに、「西洋のものなら何でもよい」という、考えが出ていた。	
20世紀	大正時代(1912～1926)			
	昭和時代(1926～1989)			
21世紀	平成時代(1989～)			